

16 Intra-sylvian cavernous angioma を合併した von Recklinghausen 病の 1 成人例

中川 忠・小倉 憲一・川崎 浩一
河野 充夫・本道 洋昭

富山県立中央病院脳神経外科

Intra-sylvian cavernous angioma (CA) を合併した von Recklinghausen 病 (RH) の極めて稀な成人例を経験したので報告する。症例は 60 才男性。10 年前に胆嚢炎で加療。この際に RH と診断された。父親と 5 人兄弟中 3 人が RH である。平成 15 年 1 月 15 日朝、歩行中に滑って転倒し、搬送された。来院時、神経学的には右片麻痺、失語症を認めた。外表所見で全身に多数の小指頭大の皮膚腫瘍とカフェ・オ・レ斑を認めた。CT 上左 sylvius 裂内に直径 3.5cm の境界明瞭な高吸収域で円形の腫瘍が見られ、perifocal edema を伴っていた。左頭頂部には急性硬膜外血腫がみられた。造影 CT で腫瘍はリング状に増強された。血管造影上 tumor stain はみられなかった。その後、急性硬膜外血腫の増大と外傷性脳内血腫も出現したため、同日緊急で血腫除去と腫瘍全摘出を行った。手術所見で、腫瘍は sylvius 裂内に限局した弾性硬の extra-axial mass で、MCA insular segment からの細い feeder があり、frontal operculum に癒着していた。腫瘍中心は器質化した陳旧性の、周辺は比較的新しい血腫がみられた。病理組織学的に CA であった。文献上渉猟し得た限りでは intra-sylvian CA の報告は 1 例のみで、また CA を合併した RH も 1 例だけで、何れも小児であった。Intra-sylvian CA を合併した成人 RH は初めての報告と思われた。

17 Linac による stereotactic radiotherapy で治療した海綿静脈洞部海綿状血管腫の 1 例

鈴木 明・柳澤 俊晴・太田 徹
木内 博之・溝井 和夫・泉 純一*
安倍 明*・戸村 則昭*・渡会 二郎*
安井 信之**

秋田大学脳神経外科

同 放射線科*

秋田県立脳血管研究センター

脳神経外科**

【はじめに】海綿静脈洞部の海綿状血管腫は海綿静脈洞部腫瘍の 2% 程度の稀な血管性腫瘍であり、手術は大量出血や脳神経障害の危険性を伴い、全摘出は極めて困難である。一方で、放射線治療が有効との報告もあり、近年は radiosurgery による治療例も散見される。今回我々は、術後に再増大した海綿静脈洞部海綿状血管腫に対して Linac による stereotactic radiotherapy (SRT) で治療した 1 例を経験したので報告する。

症例は 50 歳、女性。平成 8 年 8 月から左顔面の知覚鈍麻を自覚し、近医を受診した。MRI で鞍内から鞍上部、左傍鞍部に進展し、T1 強調像で脳実質と等信号、T2 強調像にて髄液と同等の高信号を呈し、Gd-DTPA にて強く均一に増強される腫瘍を認めた。手術は術中の大量出血のため部分摘出で終了し、病理組織は海綿状血管腫と診断された。術後、左動眼および外転神経麻痺と左耳側半盲が後遺した。平成 13 年 2 月 MRI で腫瘍の増大を指摘され、当科に紹介された。5 月 8 日から体積 14.75cm³ の腫瘍に対して 5 分割の SRT (中心線量 25.5Gy, 辺縁線量 16.8Gy) を行った。SRT 後 3 ヶ月目から腫瘍は縮小し、それに伴い視力、眼球運動障害が軽度改善した。現在、SRT 後 22 ヶ月が経過するが腫瘍は著明に縮小し、放射線障害はみられていない。

【結語】Linac による SRT は視神経に接するような比較的大きな海綿静脈洞部海綿状血管腫に対しても、安全かつ効果的な治療法と考えられた。